

## 分け合った小さな種

鹿児島県 鹿児島大学教育学部附属中学校

1年 住吉 絵美理

「運転手さんに小さな種をもらったよ。」

帰宅した私は、声高に母に話しかけた。

「えっ、何の種。」

と、母は興味深く耳をかたむけた。

それは、あるバス停での話だ。小さな子どもを抱いた若いお母さんが、

「運転手さん、すみません、降ります。」

と、あわてて席を立とうとすると、

「この先で降りるのではなかったのですか。」

と、運転手さんは聞き返した。すると、

「子どもがあまりにも泣くもので、ここで降りることにします。」

と、お母さんは言った。即座に、

「みなさん、お母さんが、子どもが泣くのでここで降りますと言っています。どうかこの先まで乗せていってはどうでしょうか。」

と運転手さんが車内放送をした。その瞬間、小さな拍手がおき、その後大きな拍手へと変わった。

「今日は、この心温まる話を話題に、クラスで乗客やお母さんに対する運転手さんの細やかな心配りについて話し合い、運転手さんの人を思いやる温かく小さな種をクラス全員で分け合ったの。」

と、詳細を母に話した。

それから数日後、私は下校途中に電停で、雨の中、立っている男の子と出会った。お母さんが迎えにくるのを待っているのかなと思しながら、しばらく見ていたが、誰も傘を持ってくる気配が感じられなかった。信号が青になると、男の子は私と同じ方向に歩き出した。

私は、雨にぬれてかわいそうにと思う一方、周囲の人目を気にしながら、

「ねえ、いっしょに傘に入らない。」

と声をかけた。男の子は無言で入ってきた。私は、男の子に不安を感じさせないように、

「何年生？一人で帰るの。」

とたずねた。男の子は、

「小学1年生、スイミングの帰りなの。妹が小さいので、お母さんは妹の世話をしているから、ぼくは一人でがんばるんだ。」

と答えた。

そして、男の子が雨にぬれないように気遣いながら歩いていると、男の子は、

「ぼくの家は、すぐそこだよ。ありがとう。」

と言って走り去った。男の子は何度もふり返り、頭をちょこんと下げて手を振った。私も手を振り、さようならの笑顔を送った。

ほんの少しの間、傘に入れてあげただけだったが、男の子と別れてからしばらくの間、言葉では表現できない晴れやかな気持ちになった。

そのとき、私はふと、クラス全員で分け合った思いやりの小さな種のことを思い出した。男の子へ差しのべた傘も、きっと小さな種だったかもしれない。けれども、こうした小さな種を少しずつまいていくことが大切であると、私は思う。そうすれば、いつか私たちの周りには親切の花の咲き誇る素晴らしい世の中になるだろう。